

## 第2章

### ラテンアメリカ小農のグローバリゼーション

#### 非伝統的輸出農産物の拡大

清水 達也

はじめに

ラテンアメリカ経済は、植民地期より鉱産物や農産物などの一次産品の輸出を通して国際市場と深く関わってきた。農産物については、プランテーションやアシエンダと呼ばれる大農場がバナナ、サトウキビ、カカオなどの熱帯産品のほか、小麦や牛肉、タバコ、綿花などを栽培して北米や欧州市場に輸出してきた。一方小規模・零細農民（以下、小農）は、肥料などの投入財や農業機械をほとんど用いずに食料農産物を中心に生産してきた。その多くは自給用で、余剰の販売は地元の市場が中心であり、国際市場と直接に関わることはほとんどなかった。

しかし、1980年以降に多くのラテンアメリカ諸国で生産が拡大する非伝統的輸出農産物の出現でその状況が変わり始めた。非伝統的輸出農産物とは、これまでプランテーションなどで生産されてきた伝統的輸出農産物とは異なる種類の輸出向け農産物を指すが、その中でもラテンアメリカでは、新鮮な状態で消費者まで届く野菜、果物、切り花の生産・輸出が顕著に拡大した。新自由主義政策の浸透、先進国市場での需要の増大、輸送・保存技術の発達を背景にまず資本力のある生産者が非伝統的輸出農産物の生産を始めた。さらに企業活動や開発援助の拡大により、契約栽培などを用いて小農もその生産に加わった。これにより小農はこれまでと比べてより直接的に国際市場とつながることになった。国際市場との結びつきが以前よりも深く、かつ直接的になった現象をグローバリゼーションと定義するならば、小農は非伝統的

輸出農産物の生産を通してグローバリゼーションに巻き込まれたのである。本稿では、グローバリゼーションによって小農と彼らが生産や生活の拠点とする農村がどのような影響を受けたかを考察したい。

ラテンアメリカの農業・農村とグローバリゼーションについては、これまでもさまざまな角度から分析がされている。農業や食品のグローバリゼーションに関する研究では、アグリビジネスによる地球規模の生産・加工・流通・販売のネットワークの構築に関する研究（中編[1998]、ボナンノ他[1999]、大塚・松原編[2004]）がある。これらの研究では、ラテンアメリカでの一例としてメキシコの野菜、果物、ブラジルのオレンジジュースを取り上げ、アグリビジネスが伝統的輸出農産物に加えて果物や大豆といった非伝統的輸出農産物もその流通ネットワークに組み込みつつあることを示している。

グローバリゼーションの小農への影響については、個別の農民や農村がどのように対応するかを分析した先行研究がある。Loker [1999]では、飼料用作物やエコツーリズムの導入、輸出加工区での雇用機会の創出など経済環境が変化すると、それに応じて作物を組み合わせ、農業以外からの収入も確保する小農の姿が描かれている。

非伝統的輸出農産物そのものを取り上げた研究も既に数多くある。1990年代前半の先行研究では、主にその拡大と国の経済発展との関係や生産者の所得と生活水準の変化を分析している（Barham et. al. [1992]）。これらには、非伝統的輸出農産物を小農にとっての新しい経済機会と肯定的に評価する研究が多い。しかし1990年代後半になると、生産者よりアグロインダストリーに偏った収益分配や、農薬の過剰な利用による環境や生産者の健康への被害を問題にする研究が増えてきた（Murray, D [1994]、Thrupp [1995]）。

本稿ではこれらの先行研究を整理して、非伝統的輸出農産物が小農と農村に与えた影響を考える。第1節では、小農がグローバリゼーションに巻き込まれる背景となった新自由主義政策の内容とその影響を、マクロ経済と農業部門に分けて整理する。第2節では、グローバリゼーションによって拡大している非伝統的輸出農産物に焦点をあて、まずその背景を説明する。次にこ

の拡大は小農にどのような影響を与えたかという先行研究を紹介する。一つは資本主義的生産者と小農の格差が広がったとする否定的な評価であり、もう一つは小農に新しい経済機会をもたらしたとする肯定的な評価である。ただし小農は新しい経済機会を得たものの、それが必ずしも持続的ではないという評価もある。第3節では、非伝統的輸出農産物が農村の社会経済構造に与える影響をみる。

## 第1節 新自由主義政策の推進

### 1. マクロ経済への影響

ラテンアメリカのグローバリゼーションを扱った多くの文献は、グローバリゼーションと、構造調整と経済自由化を柱とする新自由主義政策を併記し、新自由主義政策の結果としてグローバリゼーションが進行したとしている（Kay [1999: 285]、Teubal [2001]）。

ラテンアメリカでは、1980年代に起きた債務危機問題の解決のために、各国が国際通貨機関（IMF）と債務繰り延べ交渉を行ったが、その際にIMFや世界銀行は財政の健全化や経済自由化などの構造調整プログラムの実施を求めた。これを受けて各国では、それまでの輸入代替工業化政策を代表とする政府主導型経済政策を改め、市場の役割を重視し可能な限り政府の介入を排除することによって効率的な資源配分を行ういわゆる新自由主義政策の採用をすすめた。その一つとして採用されたのが輸出志向の開発戦略（outward-oriented development strategy）である。これにより、比較優位のある一次産品を加工し、より付加価値の高い工業製品に転換して輸出することで経済開発を目指した（西島・細野編著[2004: 75-85]）。本稿で取り上げる非伝統的輸出農産物の場合、従来の伝統的輸出農産物と比べて加工度を高くしているわけではないが、新鮮なまま消費者に届くという新しい価値を付けた一次産品として輸出が奨励された。

このような新自由主義政策の採用は、累積債務問題の軽減、インフレの沈静化をはじめとするマクロ経済の安定、1990年代の一定の経済成長の達成（西島・細野編[2004: 25]）などの成果をあげた。

## 2．農業部門への影響

農業部門でも、市場の役割を重視して農業生産性の向上を目指す政策がとられ、土地、投入財・農産物、資本市場の自由化が進められた。

まず農地については、農業共同体の解体、個人による土地私有権の確立と登記が促進された（Tuebal [2001: 59]、Kay [1999: 283]）<sup>1</sup>。これは、個人による土地の私有を認めて農地への投資意欲を高め、そのための資金を土地を担保とした融資によってまかなえるようにすることを目指した。同時に、生産性の高い農業を行う生産主体に土地が集約されるよう農地市場の確立を目指した。一部の国では企業による土地所有や農業生産を認め、大きな資本と新しい農業技術に基づいた生産が奨励された。

次に投入財・農産物の流通については、これまでの価格統制を撤廃し、流通を独占していた公社などを廃止・民営化した。また、農業部門を対象とした資本市場では、一部の生産者を対象とした優遇的な融資を廃止した。

新自由主義政策がラテンアメリカの農業部門にどのような影響を与えたかについて、メキシコの事例を中心に分析した谷は、「政策の効率化への第一歩を踏み出した」と一定の評価を与えている（谷[1997: 220]）。それによると、基礎穀物に対する保護措置の限定が財政負担を軽減しつつ、比較優位を持つ活動への生産転換を促進する政策が一定の成果を挙げている。また、貿易や土地の自由化により、蔬菜・果実を中心とする非伝統的輸出農産物が増加しているという。

それでは拡大しつつある非伝統的輸出農産物はラテンアメリカの小農にどのような影響をもたらしたのだろうか。次節ではまず拡大の背景を説明し、次に小農に対する評価について先行研究を紹介する。

## 第2節 非伝統的輸出農産物の拡大

### 1. 拡大の背景

ラテンアメリカでは1980年代以降、非伝統的輸出農産物が顕著に増加している。その背景としてあげられるのが、需要の拡大と流通網の発達である。

先進国を始めとする消費者の所得の増加や嗜好の変化により、バラエティに富んだ食品の需要が年間を通じて高まったことが、非伝統的輸出農産物の需要増大につながった。先進国の店頭にはその国では栽培されない農産物のほか、特定の時期しか栽培できない農産物が地球の反対側からも集められ、通年で並べられることが普通になっている（黒崎[1998]）。

流通網の発達については、航空機による輸送時間の短縮、冷蔵・冷凍技術の発達による生鮮食料品の保存期間の拡大、コールドチェーンと呼ばれる冷蔵輸送網の整備、そしてその利用の拡大によるコストの低下が指摘できる。これにより産地から消費者まで、これまでと比べて短い時間、低いコスト、新鮮な状態で野菜や果物を送り届けることが可能になった。さらにラテンアメリカで進んでいた新自由主義政策の採用による貿易自由化や農産物輸出の振興にこれらの要素が加わり、非伝統的輸出農産物は急速に拡大した。

拡大する非伝統的輸出農産物の生産に、誰がどのように参加し、それによって経済的上昇を実現することができるのかについては、さまざまな評価がある。次に、小農に与える影響として否定的な面を強調した先行研究と、肯定的な面を強調したものを紹介する。

### 2. 不安定雇用の増加

否定的な面を強調した研究は、従来からあるラティフンディオ（巨大土地所有） ミニフンディオ（零細土地所有）という農村の二重構造の中で非伝

統的輸出農産物を位置づけている。それによると、これらの生産に必要な新しい技術はコストとリスクが高くて小農は導入できなかった（Kay [1999: 287]）ので、これらの農産物の生産に参加できたのは、資金と技術を備えた資本主義的生産者に限られ、両者の格差が広がったという。また資金や技術以外にも、農産物の販売には先進国市場への販売ルートを確保する必要があることから、当初は大規模生産者がこれらの生産者を担った。例えば米国市場向け野菜生産が拡大したメキシコでは主に北部、北西部の比較的規模の大きい個人農が中心となった（谷[1997: 217]）。

小農への影響は、単に自らが生産できなただけにとどまらない。これまでは小農に土地を貸していた地主が、非伝統的輸出農産物の拡大の契機を捉えて自ら生産に乗り出したことで、多くの小農は耕作地を失い農外所得に頼らざるを得なくなった。非伝統的輸出農産物の生産拡大により賃金労働の需要が増加したものの、賃金が低い上に収穫期などを中心とした不安定な季節雇用が主となったために、小農の生活水準の向上には結びつかなかった。

このように非伝統的輸出農産物の拡大は、資本主義的生産者の発展を促したものの、小農部門に対しては不安定な低賃金雇用の増加しかもたらさなかった、というのが否定的な面を強調した先行研究の結果である。

### 3 . 小農の優位性

これに対して、多くの個別事例に焦点をあてて小農の生産への参加状況を検討した研究は、非伝統的輸出農産物の拡大は小農に新しい経済機会をもたらすと肯定的に評価している。

その裏付けとなるのが、労働者のインセンティブの観点から、これらの農産物の生産においては小農が優位性を持つという理論である。穀物などの生産に比べて、野菜や果物の生産においては規模の不経済により小農が優位性を持つ側面がある。それは農産物の品質と労働力の問題である（Carter et.al. [1996]）。多くの非伝統的輸出農産物は品質によって価格が大きく異なり、そ

の品質は労働力の質によって決まる。品質が収入には反映されない賃金労働力を用いる大規模生産者に比べ、小農の場合には品質の向上に努力した分だけ収入の向上に反映される家族労働者を用いる。そのため小農による生産の方が品質の高い農産物を供給できることになる。

実際に、ラテンアメリカ各国の米国アグロインダストリー企業子会社などが、契約栽培の形で小農に対して非伝統的輸出農産物の生産を奨励した。これは、初期投資費用、投入財、技術指導、販売先など、通常は小農が得ることができない資源を企業が提供することで生産を可能にするしくみである。小農による契約栽培はラテンアメリカの多くで拡大し、これにより生鮮野菜・果物が北米・欧州市場へ供給された。また、グアテマラのエンドウマメのように、当初は自社農場や中規模以上の農場から農産物を調達していたアグロインダストリーが、質のよい農産物を供給する小農からの調達割合を次第に増やす事例もあった（Glover and Kusterer [1990]）。

民間企業の主導による契約栽培だけでなく、開発援助プロジェクトとして非伝統的輸出農産物の小農による生産が奨励されたケースもある（Conroy et.al.[1996]、Murray [1994]）。例えば米国際開発庁が進めたコスタリカの「革新の農業」キャンペーンや、カリブ海諸国を対象とした「カリブ開発構想」では、基礎穀物に代わりメロン、トマト、ブロッコリー、切り花の生産が奨励された。米国際開発庁が資金融資、専門家による技術指導、輸入種子、売買契約などを提供したのである。これにより農民は、これまでの基礎食糧を中心とした農産物に比べて大きな収入を得ることができた。

このように、小農に対する影響を肯定的に評価する研究は、小農の優位性や契約栽培に着目して、非伝統的輸出農産物の拡大は小農に新しい経済機会をもたらすことを強調している。

#### 4．生産者の淘汰

非伝統的輸出農産物の拡大が小農に新しい経済機会をもたらしたとする主

張に対して、その新しい経済機会は持続的ではないと主張する研究が主に1990年代の後半にでてきた。それらの研究では、生産者である小農の多くが何らかの形で優位性を維持できずに淘汰されたとしている。

ラテンアメリカの中でも果物輸出で成功を収めたことで知られているチリの事例を取り上げた W マリイの研究は、小農の果物栽培への参加が国内外の市場の状況と時間によって変化したことを明らかにしている。この研究はブドウとリンゴについて、それぞれの別の地域の事例を分析しているが、そのいずれも果物栽培の生産に関して導入、拡大、淘汰の3つの時期に分けている。まず、導入期にはそれまで地元市場向けに農産物を生産していた中小規模農民が1970年代半ばからブドウやリンゴの生産に取り組み始める。1980年代の拡大期には、国外市場の需要増大を背景に、アグリビジネスが生産者を取り合うようになる。このとき、アグリビジネスが資金や技術を提供するかわりに農産物を独占的に買い上げる一種の契約栽培を利用して、それまで生産に参加できなかった中小規模農民も参入し、生産が一気に拡大した。多くの農民が特定の作物、なかでも国際市場での需要の高い品種の生産に特化するモノカルチャー化を進めた。このときに競争力のない農家は土地を手放し、土地の売買が活発化した。しかし1990年代に入り農家間、産地間の競争により市場が飽和して価格が下落すると、生産者の淘汰が始まり、その多くが偽装無産階級化(*disguised proletarianization*)した。偽装というのは、債務を抱えた農家がアグリビジネスとの契約に縛られ、自らの農場を持ちながらも実質的にはアグリビジネスの労働者として働き続けることを指す。そうでなければ、債務返済のために農場を売却して無産階級となった。この研究によれば、非伝統的輸出農産物ブームは農村部に目立った生活水準の向上はもたらしておらず、パトロンがアグリビジネスという新たな二重構造を生み出したと結論づけている。

中米においても、小農による非伝統的輸出農産物の生産が持続しなかった事例が報告されている。その原因の一つが残留農薬の問題である。グアテマラ産のエンドウマメやブロッコリーは、1980年代中頃から末にかけて残留農

葉が基準値を超えているために米国が輸入を許可しないという事態が発生した(Thrupp [1996])。これは、多数の小農から農産物を買付けた輸出業者が十分に品質管理をできなかったためである。この後、多くの輸出業者が農薬散布などの状況を把握しやすい大規模生産者からの調達に変えたという。輸出業者の視点から見ると、小農から買入れるほうが農産物の品質自体が優れているというメリットがある。しかし生産の状況を把握し品質を管理する点においては、少量を生産する多数の小農との取引はコストがかかる。このケースは、コストがメリットを上回り小農の優位性が消滅することがあることを示した例といえる。

### 第3節 農村の対外依存度の拡大

これまでみたように 1980 年代以降のラテンアメリカにおける非伝統的輸出農産物の拡大により、小農はこれまでと比べてより密接的に国際市場の影響を受けるようになった。第2節では、個別の小農がこれによりどのような影響を受けたかについて、否定的・肯定的な評価を紹介した。それでは非伝統的輸出農産物の拡大により小農がグローバリゼーションに巻き込まれる過程において、農村を単位とした場合にはどのような変化がみられるのだろうか。その変化をみる分析視角として伊豫谷のローカル市場の解体の議論(伊豫谷[2001: 28-51])を援用する。そして、先に挙げた先行研究にその議論をあてはめ、農村の社会経済構造の変化をどのように解釈できるかを考えたい。

#### 1. ローカル市場解体の三局面

伊豫谷は経済の地域的再生産体を「ローカル市場」と名づけ、それが解体していく過程を三局面に分けて考察している。ローカル市場を市場向け商品生産部門と生存維持部門に分け、さらに生存維持部門を日用必需品生産、生産投入財生産、基礎食糧生産に分類して分析する枠組みを提示している(表

1) そして、市場向け商品生産がどれだけ行われているかと、生存維持部門の三つの財をどれだけ外部に依存するかをみることで、ローカル市場の解体の局面を定義している。

表1 ローカル市場解体の三局面

	市場向け商品生産部門	生存維持部門		
		日用必需品生産	生産投入財生産	基礎食糧生産
第一局面 権力的包摂				
第二局面 市場包摂		×		
第三局面 再生産包摂		×	×	×

はそれぞれの生産が内部で行われていること、×は外部に依存することを示す。

出所 伊豫谷[2001: 32, 35]をもとに筆者作成。

「権力的包摂」と名づけられた第一局面では、強制労働を用いて市場向け生産部門が創出される。換金作物がプランテーションなどのいわゆる飛び地で生産され、生存維持部門とはほとんど関わりを持たない状態である。「市場包摂」と名づけられた第二局面では市場向け生産部門が発達し、プランテーションなどの飛び地以外でも換金作物の生産が行われる。また、ローカル市場の産出物の商品化が進み、外からの日用必需品の流入によって、ローカル市場における手工業生産が崩壊してゆく。しかし、基礎食糧の生産やそれに必要な投入財は内部でまかなわれる。これが「再生産包摂」と呼ばれる第三局面までローカル市場の解体が進むと、基礎食料生産までもが商品化され、生産に必要な投入財も外部に依存することになる。

## 2．ラテンアメリカ農村への適用

伊豫谷のローカル市場解体の議論に基づいて、ラテンアメリカ農村の状況をみてみよう。まず 20 世紀前半までは植民地時代より大農場において、黒人労働者や先住民の農村共同体の労働力を利用してサトウキビ、タバコ、綿花、ゴムといった輸出向け農産物が生産されてきた。一方、農村においては、日用必需品、生産投入財、基礎食糧ともローカル市場内部で生産されており、この状態は第一局面である「権力的包摂」に相当する。

農村における人口圧力が高まり 1 人あたりの耕作地面積が縮小するにつれ農業収入が減少し、これを補うために農村内での賃金収入への依存が高まる。また、交通機関の発達により国内の移動が比較的容易になり、収穫期のプランテーションへの出稼ぎも増える。この段階において小農は、基礎食糧は自らの耕作地において生産しつつも、衣料ほかの日用必需品については賃金労働で得た現金を用いてローカル市場外で生産されたものを購入する。国内製造業の発達により大量に生産された安価な工業製品が市場に出回ると、ローカル市場で手工業により生産された日用必需品は競争力を失い、生産が衰退する。これは第二局面の「市場包摂」にあたり、現在ラテンアメリカの多くの農村で見られる。

## 3．非伝統的輸出農産物の拡大と「再生産包摂」

伊豫谷の議論によると、農村が次に進むのは「再生産包摂」であるが、非伝統的輸出農産物の拡大が進むラテンアメリカ農村で「再生産包摂」まで進んでいるかどうかは、小農が賃金労働力としてその生産に参加するのか、それとも小農自らが生産者となるのかによって異なってくると考えられる。

伊豫谷は「商品経済の浸透が、ローカル市場の再生産の根幹に及ばない限り、換言すれば、ローカル市場の商品経済化が市場向け一次産品部門の産出物を中心とし、生存維持部門に及ばない限り、ローカル市場の解体は部分的

たらざるをえない」(伊豫谷[2001: 36]、原文のカッコ内省略)と述べている。

小農が自給用農産物の生産を続け、そのかたわらで資本主義的生産者による非伝統的輸出農産物の生産が生み出した季節雇用により収入を得るのであれば、ローカル市場の商品経済化が生存維持部門には及ばず、その解体は部分的となる。

一方、小農が自ら生産を手がける場合には、非伝統的輸出農産物の収益は基礎食糧作物よりも大きいことが多いため、条件のよい土地は食糧作物から非伝統的輸出農産物に置き換わることが考えられる。この場合、必要な生産財は改良品種の種子や化学肥料、農薬など農村内では生産できないものであり、外部から調達しなければならない。その結果、ローカル市場の解体が進み、「再生産包摂」により近づくと考えられる。第2節では小農が自ら生産に参加することで所得の向上を実現する例を提示したが、これは言い換えれば、小農がグローバル化によって経済的上昇を手にするには、ローカル市場の解体が伴う、ということになる。

おわりに

本稿では小農がグローバル化に巻き込まれる直接の要因となった非伝統的輸出農産物の拡大を取り上げ、小農にどのような影響を与えたのかを先行研究を通して検討した。そこには、否定と肯定の両方の評価があることがわかった。否定的に捉える先行研究は、非伝統的輸出農産物の拡大により小農は不安定雇用への依存を深める、と評価している。肯定的に捉える研究は企業活動や国際援助の拡大により、契約栽培という手法で小農でも自ら生産を手がけて、所得を向上できるとしている。

このように非伝統的輸出農産物の拡大が小農に与えた影響に関する先行研究の事例を集めると、研究によって結論が大きく異なる。それは、それぞれが異なる事例を検討しているばかりでなく、同じ事例でも異なる時点で検討をしていることが要因であるほか、農村の農民全体を対象とするのか、それ

とも契約栽培に参加した小農を対象とするか、分析対象の範囲が異なるためであると考えられる。今後は、それぞれの先行研究をより精緻に比較することで、非伝統的輸出農産物の小農への影響に関する評価を定めたい。

農村の社会経済構造の変化については、小農が自ら生産者として非伝統的輸出農産物の生産に携わることは、所得向上の機会をもたらす反面、生存維持部門の解体を進めることになる。この点については、個人の所得向上がもたらす正の効果が、農村全体の生存維持部門の解体がもたらしうる負の効果を上回るかどうかを見極める必要がある。これについては具体的な事例を取り上げて詳細に検討することを今後の課題とする。

---

<sup>1</sup> ラテンアメリカで 1980 年代までに行われた農地改革では、改革の対象となった部門の多くが共同所有・共同経営の形をとった。これは、農地改革後も輸出農産物の生産において規模の経済を保って外貨収入が落ち込むことを防ぐことが目的であった。同時に、政府による生産・販売のコントロールを容易にする手段でもあった。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- 伊豫谷登士翁[2001]『グローバリゼーションと移民』有信堂光文社。
- 黒崎利夫[1999]「非伝統的農産物輸出と持続的発展 - 中米農業の復活と国際資本の支配 - 」(小池洋一・堀坂浩太郎編『ラテンアメリカ新生産システム論 - ポスト輸入代替工業化の朝鮮』アジア経済研究所)。
- 清水達也[1999]「ラテンアメリカの非伝統的農産物生産と輸出」(星野妙子編『ラテンアメリカ政治経済の新展開』調査研究報告書、アジア経済研究所)。
- 高根務[2003]「経済のグローバル化とアフリカ農村 非伝統的輸出作物の事例から」(大原興太郎ほか編『持続的農業農村の展望』大明堂)。
- 谷洋之[1997]「農業部門における自由化の功罪」(小池洋一・西島章次編『市場と政府 - ラテンアメリカの新たな開発枠組み - 』アジア経済研究所)。
- 平凡社[1999]『ラテン・アメリカを知る事典』平凡社。
- 中野一新[1998]『アグリビジネス論』有斐閣。
- 西島章次・細野昭雄[2004]『ラテンアメリカ経済論』ミネルヴァ書房。
- ボナンノ他[1999]『農業と食料のグローバル化 - コロンブスからコナグラへ - 』筑波書房。

<外国語文献>

- Barham, Bradford, et.al. [1992] "Nontraditional Agricultural Exports in Latin America," *Latin American Research Review*, 27 (2), pp.43-82.
- Brass, Tom ed. [2003] *Latin American Peasants*, Library of Peasant Studies No. 21, London: Frank Cass.
- Bryceson, Deborah, C. Kay and J. Mooij eds.[2000] *Disappearing Peasantries?*, London: Intermediate Technology Publications,.
- Carter, Michael R., Bradford L. Barham and Dina Mesbah [1996]

- “Agricultural Export Booms and the Rural Poor in Chile, Guatemala, and Paraguay,” *Latin American Research Review*, 31 (1), pp. 33-36.
- de Janvry, E. Sadoulet, L. Wilcox young [1989] “Land and Labour in Latin American Agriculture from the 1950s to the 1980s,” *Journal of Peasant Studies*, 16, pp.396-424.
- Kay, Cristobal [1999] “Rural Development: From Agrarian Reform to Neoliberalism and Beyond,” in R N. Gwynne and C. Kay eds, *Latin America Transformed: Globalization and Modernity*, London: Arnold, 1999.
- Kay, Cristobal [2000] “Latin America’s Agrarian Transformation: peasantization and Proletarianization,” in D. Bryceson, C. Kay and J. Mooij eds., *Disappearing Peasantries?*, London: Intermediate Technology publications, 2000.
- Loker, William M. [1999] “Grit in the Prosperity Machine: Globalization and the Rural Poor in Latin America,” in W. M. Loker ed., *Globalization and the Rural Poor in Latin America*, Boulder, Colorado: Lynne Rienner Publishers, 1999, pp.9-39.
- Loker, William M. ed. [1999], *Globalization and the Rural Poor in Latin America*, Boulder, Colorado: Lynne Rienner Publishers.
- Murray, Douglas [1994] *Cultivating Crisis: The Human Cost of Pesticides in Latin America*, Austin, Texas: University of Texas Press.
- Murray, Warwick E. [2003] “From Dependency to Reform and Back Again: The Chilean Peasantry during the Twentieth Century,” in T. Brass ed. *Latin American Peasants*, London: Frank Cass.
- Teubal, Miguel [2001] “Globalización y nueva ruralidad en América Latina,” en N. Giarracca compiladora, *¿Una nueva ruralidad en América Latina?*, Buenos Aires: CLACSO 2001, pp.45-65.
- Thrupp, Lori Ann [1996] *Bittersweet Harvests for Global Supermarkets:*

*Sustainability and Equity in Latin America's Agroexport Boom*,  
Washington, D.C.: World Resources Institute.

Von Braun, Joachim, David Hotchkiss and Maarten Immink [1989]  
Nontraditional Export Crops in Guatemala: Effects on Production,  
Income, and Nutrition. Washington, D.C.: International Food Policy  
research Institute.